

西田文学読書会(第41回) 2024.11.16 (13:45~15:45)
村上春樹「とんがり焼の盛衰」(第1回)
・佐野・岡部・橋谷・田中・奈原・大藤・本田・渡辺・安・趨・鹿
○第2回読書会予定 2024.12.21(土)(13:45~15:45)
○レポート締切予定 2025.1.18(土)
○第3回読書会予定 2025.1.25(土)(13:45~15:45)

『はじめての文学』村上春樹版 2006.12.10 文芸春秋

とんがり焼の盛衰

村上 春樹

ぼんやりと朝の新聞を眺めていたら、隅の方に「名菓とんがり焼・新製品募集・大説明会」という広告が載っていた。とんがり焼っていったい何のことなのかよくわからない。でも名菓とあるからにはやはり菓子なのだろう。僕は菓子についてはちょっとうるさい方である。それに暇だったから、とにかくその「大説明会」というのに顔を出してみることにした。

「大説明会」はホテルの広間で催され、お茶と菓子までついていた。菓子はもちろんとんがり焼である。僕はひとつまんでみたが、とくに感心する味ではなかった。甘さの質がねちねちとしていて、皮の部分もつさりとしすぎている。今の若い人間がこんなものを好んで食べるとはとても思えない。

でも説明会に来ていたのは僕と同じくらいか、あるいはもっと年下の若い人ばかりだった。僕は952番という番号札をもらったが、まだあとから百人くらいは来たから、だいたい千人以上の人間がこの説明会に来たことになる。たいしたものだ。

僕の隣には二十歳くらいの度の強い眼鏡をかけた女の子が座っていた。美人ではないが、わりに性格の良さそうな女の子だ。

「ねえ、君はこれまでにとんがり焼って食べたことあった？」と僕は訊ねてみた。

「あたりまえじゃない」と女の子は言った。「だって有名でずもの」

「でもそんなに美味く……」と僕が言いかけたところで彼女が僕の足を蹴とばした。まわりの人間が僕の方をじろりと見た。嫌な雰囲気だ。でも僕は「熊のプー」のような無邪気な目をしてその場をやりすぎした。

「あなたってバカねえ」と少しあとで女の子がそっと耳うちした。「ここにきてとんがり焼の悪口なんか言ったら、とんがり焼につかまって生きては帰れないんだから」

「とんがり焼？」と僕はびつくりして叫んだ。「とんがり焼

つ……」

「し……」と女の子が言った。説明会が始まった。説明会ではまず「とんがり製菓」の社長がとんがり焼の歴史について話した。平安時代^[2]に誰か何をしてこうなったのがとんがり焼の原型であるとかいった類の真偽不明の話だ。古今和歌集にもとんがり焼についての和歌が入っているということである。おかしいから笑おうかとも思ったが、まわりの人間はみんな真剣そうな顔で聞き入っていたし、とんがり焼もこわいので結局笑わなかった。社長の説明はまる一時間つづいた。すごく退屈だった。

彼の言いたいことは要するに「とんがり焼は伝統のある菓子である」というだけのことなのだ。そんなの一行で済む。

それから専務が出てきて、とんがり焼新製品募集についての説明を行なった。長い歴史を誇る国民名菓とんがり焼もそれぞれの時代に即した新しい血を入れて弁証法的に発展していかねばならないとかいった説明だ。そういうと聞かえはいいが、要するにとんがり焼の味が古くさくなつて売上げが落ちてきたので若い人のアイデアが欲しいということである。それならそうとはつきり言えればいいのだ。

帰りに募集要綱をもらった。とんがり焼をベースにした菓子を作って1カ月後に持参すること、賞金は二百万円とある。二百万円あれば恋人と結婚して、新しいアパートに移ることができる。それで僕は新とんがり焼を作ることにした。

前にも言ったように、僕は菓子についてはちょっとうるさい。あんこやクリームやパイの皮なんか、どんな風にも作ることができる。一カ月に新しい現代的なとんがり焼を作り出すくらい簡単である。僕は締切の日^[3]に新とんがり焼を二ダース作り、とんがり製菓の受付に持っていった。

「おいしそうねえ」と受付の女の子がにっこりほほえんで言った。

「おいしいよ」と僕は言った。

*

その一カ月後にとんがり製菓から明日会社においてほしいという電話がかかってきた。僕はネクタイをしめてとんがり製菓にでかけた。そして応接室で専務と話をした。「あなたの応募された新とんがり焼は社内でもなかなか好評であります」と専務が言った。「なかでも、あ——、若い層に評判がよろしい」

「それはどうも」と僕は言った。

「しかし一方ですな、ん——、年配のものの中には、これではとんがり焼ではない^[4]と申すものもおりましたすな、ま、甲論乙駁という状況でありますな」

「はあ」と僕は言った。いったい何か言いたいのかさっぱりわからない。

「で、この際とんがり鴉さまの御意見をうかがおうではないかと、重役会議で決定致しましたのであります」

「とんがり鴉！」と僕は言った。「とんがり鴉というのはいったい何のことでしょうか？」

専務はわけがわからないといった顔をして僕を見た。「あなたはおとんがり鴉さまのことも知らずに、このコンクールに応募されたのですか？」

「申しわけありません。どうも世事に疎いもので」

「困りましたな」と言って専務は首を振った。「とんがり鴉さまのことも御存知ないというのは……でも、ま、よろしゅうござんす。私のあとについていらつしやい」

僕は彼のあとについて部屋を出て、廊下を歩き、エレベーターで六階に上り、それからまた廊下を歩いた。廊下のつきあたりには大きな鉄の扉があった。プザーを押すとがしりとした体格の守衛が出てきて、相手が専務であることを確認してから扉の鍵を開けた。なかなか警戒が厳重だ。

57

「この中にとんがり鴉さまがいらつしやいます」と専務が言った。「とんがり鴉というのは昔々からとんがり焼だけを食して生きておる特殊な鴉の一族であります……」

それ以上の説明は不要だった。部屋の中には百羽以上の数の鴉がいた。高さ五メートルくらいのがらんとした倉庫みたいな部屋に何本もの横棒が渡され、そこにとんがり鴉がずらりと並んで座っていた。とんがり鴉は普通の鴉よりずっと大きく、大きなもので体長「メートルくらいあった。小さいものでも六十センチくらいはある。よく見ると彼らには目がなかった。目のあるべき場所には白い脂肪の塊りがくっついていただけだ。おまけに体ははちきれんばかりにむくんでいる。部屋の中はうす暗く、いやなおいがした。

僕たちが中に入った音を聞きつけるととんがり鴉たちはばたばたと羽ばたきをしながら一斉に何かを叫びはじめた。最初のうちはただの轟音にしか聞こえなかったが、やがて耳が馴れてくると彼らがみんな「とんがり焼・とんがり焼」と叫んでいるらしいことがわかった。見るからにおぞましい動物だ。

専務が手に持っていた箱の中からとんがり焼を出して床に撒くと、百羽のとんがり鴉たちが一斉にそれにとびかかった。そしてとんがり焼を求めて互いの足にくらいつき、目をつつきあつた。やれやれ、これじゃたしかに目が失くなってしまふわけだ。

その次に専務はさつきとは違うべつの箱から、とんがり

焼に似た菓子を取りだしてばらばらと床に撒いた。「よござんすか、これはとんがり焼コンクールで落選したものです」鴉たちは前と同じようにそれに群がったが、それがとんがり焼でないことがわかるとそれを吐き捨て、口ぐちに怒りの声をあげた。

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

と彼らは大声で叫んだ。その声为天井に反響して、耳の奥が痛くなるほどだった。

「ほらね、本物のとんがり焼しか食べないんです」と得意そうに言った。「偽物だと口もつけないんです」

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

「じゃ、こんどはあなたのお作りになった新とんがり焼を撒いてみましょう。食べれば入選、食べなければ落選です」大丈夫かな、と僕は不安になった。「そんなことして大丈夫なんですか？」と僕は専務にたずねてみた。なんだかすごく不吉な予感がしたからだ。だいたいこんないい加減な

連中に食べさせてみて当落を決めるなんてすごく変な話だ。もつとまともな選び方があるはずなのだ。しかし専務は僕の不安にはおかないしに、僕が応募した「新とんがり焼」を景気よく床に撒いた。鴉たちはまたそれに群がった。それから混乱が始まった。ある鴉は満足してそれを食べ、ある鴉はそれを吐き出してとんがり焼！ とどなった。次に

それがありつくことができなかった鴉が興奮して、それを食べた鴉の喉笛をくちばしで突いた。血が飛び散った。べつの鴉が誰かが吐き出した菓子にとびついたが、とんがり焼！ と叫んでいた巨大な鴉に捕まって腹を裂かれた。そんな具合に乱闘が始まった。血が血を呼び、憎しみが憎しみを呼んだ。たかが菓子のことなのだけれど、鴉たちにとってはそれが全てなのだ。それがとんがり焼であるか非とんがり焼であるか、それだけが生存をかけた問題なのだ。

58

「ほらごらんさい」と僕は専務に言った。「急にあんなに撒いちゃうものだから刺激が強すぎたんですよ」

それから僕は一人で部屋を出て、エレベーターで下に降り、とんがり製菓の建物を出た。賞金の二百万円は惜しかったけれど、この先の長い人生をあんな奇妙な鴉たちの相手をしながら生きていくのはごめんだ。

僕は自分の食べたものだけを作って、自分で食べる。

鴉なんかいつまでもお互いにつつきあつていればいいんだ。

【討論の柱】

- ◎「とんがり焼の盛衰」という小説は何を表しているか？
- ◎この小説で「とんがり焼は何を表しているか？」
「AはBを表している」

・榎谷：ぱつと浮かばない。

・佐野：宗教とかイデオロギー、伝統、権威によって成り立つ何か？ 若い人がどう受け取っていくか？

・岡部：難題。歴史的な評価の定まったもの。歴史的なモノを引つ張ってきて（現代のとんがり焼）を正当化する。過去にとんがり焼があつたとは限らない。権威付け。真にはわからないが。

・大藤：なんでもいいが、村上春樹が何を考えたのか？

「これは小説か小説ではないか」ノーベル賞

授業を実践してみてもらう

三年目の先生が新しい授業を問われて、ディベートをする
とそれは古い、討論ではだめなのか、授業じゃないと言われた。新人に見てもらおう

研究者の場合、論文か論文じゃないかが問題

説明の言葉が尽くされているのに「一行ですむ」

言葉はいっぱいあるのに、表していることは一行、その関係が気になった。

＜言葉と表現の関係＞

・榎谷：「春の祭典」聴衆が騒ぎ出して喧嘩した。音楽が聞こえなくなった

余りに新しすぎると受け取り手が受け止めきれない。

聴衆がとんがりガラスに見える

聴衆に新しい芸術（新しいお菓子）古くて新しい

歴史の中に新しいものが登場してきたときの反応

「建物を出る」受け狙いではなく、自分の気持に忠実に作りたい（芸術家の態度）

お菓子を題材にして面白おかしく表現している

・渡辺：大藤、榎谷の意見から思いついたのは、これは村上春樹自身の経験を書いたものではないか。

とんがり焼き＝純文学

とんがり鴉＝文壇に巣くう評論家 作家

村上春樹が芥川賞をとれなかった時の体験を笑い飛ばした
寓話ではないか

・杏原：具体的な記憶が出て来た。

10年前に和菓子業界の社長が集まってシンポジウムをした。
日本菓子工業会の業界団体の「専務」が話した話。

菓子業界の競争の激しさ。ブランド、老舗を残しながらも
新しい時代に生きて行かねばならない。伝統にとらわれず
に新しいブランドを作り、とてもおいしい。

老舗における伝統と革新をテーマにした。

とんがり焼を守る意見と換骨奪胎する意見

意思決定の方法がとんがり鴉（内部機関）に経営陣が丸投げする方法。

経営陣の中の意見の対立

100人の外部の若者の意見を聞く（方針決定の方法）

内部の専門機関に判断をゆだねる

意思決定の難しさ。

会社が大きくなってくると意思決定の難しさ。

鴉どうしの殺し合い＝企業同士の競争の激しさ

「事実が小説よりも奇なり」

事実と観念の脈絡？

・小説は哲学的本質を表現する

・小説は事実実だけを面白く表現する

本質とを往復する読み

・岡部：文壇批判が定説だがそれを超えたい。とんがり焼きを作るのは自分流でいいんだというのが現代多いような気がするが、どこから来たのか？「僕は自分の食べたものだけを作って、自分で食べる。」というのが受け入れられる。

・佐野：宗教的イデオロギーの権威がすべての根本にある。何かに関わろうとすればそれが関わって来る。人間が社会を作っている限り、そうならざるを得ない。とんがり焼の価値をどう見るか。僕は自分のやりたいようにやる。

・榎谷：現代発信が簡単になったから、僕流の生き方が受け入れやすいようになった。選択肢が増えた。ネットで発信しやすくなった。200万円がかかっているが、困っていればこれで行きたいと思う人が多いと思う。鴉の描写は醜く怖い。凶暴性への恐怖と批判が込められている。神の使いお告げとしての鴉が閉じ込められているが会社の自由にならない。目が見えない。両面性が込められている。

・佐野：若い人が生きて行くこうとするなら、鴉の意向は無視できない。お菓子だろうが、権威に認められなければ、生きていけない。権威の内部に対立がある。

・岡部：これは本当の権威か？ 全体としての悪意を感じる。権威とは文芸春秋が売り上げを揚げたいために、やっていることに過ぎない。

・佐野：審査する人は本気になっているはずだ。

・榎谷：会社から出たら意味がない「会社の中でしか通用しない評価」と「僕は自分の好みで生きる」の二項対立であり、そこにどどまると思う。自分もお金が欲しくて取りに行ったり、鴉の一匹になっていると思わせられる。

・岡部：並べて対立させるにしても、若い人は本当には芥川賞がそれほど関心事ではない。どこでぼくたちの気持が変わったのかなと思う。

・榎谷：現代、たくさん売れたら正義というような感じがあ

佐野：とんがり焼きとは何かと本気で追及する人は必要ではないのか？

楢谷：それが衰退してきているのではないか？

岡部：今は衰えてきている。

楢谷：予算の分捕り合戦のようになっていて。鴉か20万円に群がる若者か、どちらかになる？

奈原：保守か革新か、マスクのやっていること。最後の一行はうら寂しい感じがある。超孤独。賞が欲しいという低次元の名誉欲をもっているというのがしみじみ感じる。後味の悪さを感じる。人間は一方で折り合いをつけながら生きていく。政争をやっても折り合いをつけないと前に進めない。結末、現実的でもあり文学的詠嘆でもある。

楢谷：後味の悪さ、突き放したような感じ。お菓子だからよいが、好きなものを作って食べればよいが、それは素人だからよいので、広がりがない。文学のつもりでこれを書いているのなら、趣味なのか？ たまたま売れたというスタンスなのかもしれない。

奈原：これは共感できるところが少ない作品。村上春樹にはストインズムを感じるが、この小説はあまり感じない。

楢谷：新しいとんがり焼きを作ることに関心がなくなった。商売なら向こうの要求に合わせて作って、売るために作ることになるが、新しいものを作るときに審査の対象になる。鴉たちが審査する。

佐野：お菓子を作るのは得意だが。

奈原：おたくだ。自己満足だから、市場に受けなくて構わない。僕の製品はとんがり焼きのコンセプトを超えないもの、保守的な考えの枠を超えないものであった。破壊的創造性がなく、古いコンセプトを超えないものであった。鴉の審査機関の内部の権力争いが起こり、その折り合いをつけながらやっていく。芥川賞の審査になると、本当の殴り合いになって来る。決して軽視できない現実。

岡部：自分流でいいのか？ なんで応募したのか？ 応募した後で審査員に馬鹿野郎といっているわけで、負け惜しみをしているところに愛らしさがある？ 応募しているのだから、俺流というのも、落ちたことが悔しい。負け惜しみが可愛い。

楢谷：賞を取ったら付き合っ行って必要があるような含み。

大藤：どのレベルで折り合いをつけたらいいのか？ 保守と革新、どのレベルで新しいものを作ったらいいのかわからないなあ。僕の話は今よりおいしいものを作ること求めているのに、お客、審査員によってよりよい回答を欲しかったのに、鴉が二択で争っているのを見て、失望した。こういう場合どこで折り合いをつけるか、論文を作る場合もどこで折り合いをつけるか。

奈原：教祖の枠を逸脱するかどうかの問題。価値判断がど

こに線を引いて決められるのが問題。

大藤：新しいけりやいいというわけではないのはよくわかるが、とんがり焼きになるように主人公は作っているが、鴉はそれがとんがり焼きかどうかでもめる。新しいものが求められても、新しすぎたらだれも受け入れてくれない。どこで折り合いをつけるか。

佐野：自分が書きたいことがあるのと、誰に読んでもらいたいかの問題があると思う。

奈原：僕は良いものを作ったという思いがあったのに、うまくいかなかった。

楢谷：おいしいかどうか(自分も若い人も食べたいと思う)とんがり焼きかどうか(とんがり鴉の評価)という二つの価値。おいしいものができたと僕は思ったが、鴉はとんがり焼きかどうかを問題にしている。文学賞の受賞作を決めるときは、その間にずれがある。ぼくは一般読者の関心に立っているが、それが俺基準でしかない。

佐野：僕の味覚と一般の人の味覚は二応区別している。同一視はしていない。

楢谷：「八つ橋」「赤福」「もみじ饅頭」

大藤：最初は若い人に届くようにと思って作っていたが、後には一般人に受け入れられるようにと変わっていった。

佐野：まず自分が楽しいと思わないと書けないよ。

楢谷：楽しかったものが通る。

大藤：ある人々に自分の描いたものを届ける場合にどう考えたらよいのか？相手の弁別をどうするのか？ そこで何が肝になって来るのか。

楢谷：後味の悪さは、一般人の反応が書かれていない。届けたらと思ってきた人の届けるのがポジティブな対応だ。

佐野：どのみち他人は理解して呉れない。論文を手を取ってくれる人に対して情理を尽くして書いていく。

岡部：常にフルスイングするのではなく、ヒットもファウルも打てなきゃならない。他の人でも書けることだけ書いているだけでは仕事は来ない。読者に受け入れられるものを書きながら、そこに自分でなければという部分を必ず少しだけ入れる。100パーセント自分の思う事を書くというのではなく、それだけではだめ。

大藤：どこまで割り切るのか、先生に分かってもらおうと思っって書くのだが、

フルスイングすることはこの場合お菓子

お菓子を自分との関係と、とんがり鴉と自分の関係

どのように距離をとっているのかな？

お菓子という問題を描いてそこでいろいろやりとりをする。そのやりとりはどういう形でなされるのか？

岡部：とんがり鴉への調査がないのが問題ではないか。

・大藤：おかしの領域に対する価値判断がそもそもあるんだらうか？ とんがり鴉の基準に合わせる必要があるか？

とんがり焼きとは何か？ お菓子って何か？ 人間は問題にどう向き合ったらいいか、応答したらいいか。ある人の応答には関心を持っている。問題に真摯に向き合う。

・佐野：事柄に応答する時、そこに他者の問題が開かれないか？ 最後の二行も、他者に開かれているというべきではないか。

・榎谷：受付のお姉さんととんがり鴉をどのような位置に置いているかという問題化？どつちを上位に置いているかという問題か？ それは自分の問題意識と呼応する問題ではないか。自分にとって一番大事な問題が前面に出て来る。とんがり焼の本質に興味を持つことで道が開けるのかもしれない。とんがり焼きたらしめている特徴だけは残して、複数の価値の組み合わせでできている。

・大藤：応答する時には人との間には共通性が必ずどこかにある。

・佐野：応答するとは我を忘れて受け取っている、開かれている。経験を伝えたくなる。自分は破られ、出来事は現れるという広さを持っている。出来事との出会い。鴉は自分に閉じているのであって、それに関わることはないだろう。わかっているという事の破れを通してしか出会いはない。

とんがり焼の盛衰

村上 春樹

「ぼんやりと朝の新聞を眺めていたら、隅の方に「名菓とんがり焼・新製品募集・大説明会」という広告が載っていた。とんがり焼っていったい何のことなのかよくわからな
い。でも名菓とあるからにはやはり菓子なのだろう。僕は菓子についてはちよつとうるさい方である。それに暇だったから、とにかくその「大説明会」というのに顔を出して
みることにした。

「大説明会」はホテルの広間で催され、お茶と菓子までついていた。菓子はもちろんとんがり焼である。僕はひとつまんでみたが、とくに感心する味ではなかった。甘さの質がねちねちとしていて、皮の部分もつさりとしすぎて
いる。今の若い人間がこんなものを好んで食べるとはとても
思えない。

でも説明会に来ていたのは僕と同じくらいか、あるいはもつと年下の若い人ばかりだった。僕は952番という番号札をもらったが、まだあとから百人くらいは来たから、
だいたい千人以上の人間がこの説明会に来たことになる。たいしたものだ。

僕の隣には二十歳くらいの度の強い眼鏡をかけた女の子が座っていた。美人ではないが、わりに性格の良さそうな女の子だ。

「ねえ、君はこれまでにとんがり焼って食べたことあった？」と僕は訊ねてみた。

「あたりまえじゃない」と女の子は言った。「だって有名ですもの」

「でもそんなに美味く……」と僕が言いかけたところで彼女が僕の足を蹴とばした。まわりの人間が僕の方をじろりと見た。嫌な雰囲気だ。でも僕は「熊のプー」のような無邪気な目をしてその場をやりすごした。

「あなたってバカねえ」と少しあとで女の子がそつと耳うちした。「ここに来てとんがり焼の悪口なんか言ったら、とんがり焼につかまって生きては帰れないんだから」

「とんがり焼？」と僕はびつくりして叫んだ。「とんがり焼って……」

「し——っ」と女の子が言った。説明会が始まった。

説明会ではまず「とんがり製菓」の社長がとんがり焼の歴史について話した。平安時代12に誰が何をしてこうなったのがとんがり焼の原型であるとかいった類の真偽不明の話だ。古今和歌集にもとんがり焼についての和歌が入っているということである。おかしいから笑おうかとも思

ったが、まわりの人間はみんな真剣そうな顔で聞き入っていたし、とんがり焼もこわいので結局笑わなかった。社長の説明はまる一時間つづいた。すぐく退屈たいくつだった。彼の言いたいことは要するに「とんがり焼は伝統のある菓子である」というだけのことなのだ。そんなの一行で済む。

それから専務が出てきて、とんがり焼新製品募集についての説明を行なった。長い歴史を誇る国民名菓とんがり焼もそれぞれの時代に即した新しい血を入れて弁証法的に発展していかねばならないとかいった説明だ。そういうと聞かえはいいが、要するにとんがり焼の味が古くさくなつて売上げが落ちてきたので若い人のアイデアが欲しいということである。それならそうとはつきり言えればいいのだ。

帰りに募集要綱をもらった。とんがり焼をベースにした菓子を作つて1カ月後に持参すること、賞金は二百万円、とある。二百万円あれば恋人と結婚して、新しいアパートに移ることができる。それで僕は新とんがり焼を作ることにした。

前にも言ったように、僕は菓子についてはちよつとうるさい。あんこやクリームやパイの皮なんか、どんな風にも作ることができる。一カ月に新しい現代的なとんがり焼を作り出すくらい簡単である。僕は締切の日あきぎりに新とんがり焼を二ダース作り、とんがり製菓の受付に持っていった。「おいしそうねえ」と受付の女の子が「こりほほえんで言った。

「おいしいよ」と僕は言った。

*

その一カ月後にとんがり製菓から明日会社においてほしいという電話がかかってきた。僕はネクタイをしめてとんがり製菓にでかけた。そして応接室で専務と話をした。「あなたの応募された新とんがり焼は社内でもなかなか好評であります」と専務が言った。「なかでも、あ——、若い層に評判がよろしい」

「それはどうも」と僕は言った。

「しかし一方ですな、ん——、年配のものの中には、これではとんがり焼ではない14と申すものもおりましてですな、ま、甲論乙駁という状況でありますな」

「はあ」と僕は言った。いったい何か言いたいのかさっぱりわからない。

「で、この際にとんがり焼さまの御意見をうかがおうではないかと、重役会議で決定致しましたのであります」

「とんがり焼！」と僕は言った。「とんがり焼というのはいったい何のことでしょうか？」

専務はわけがわからないといった顔をして僕を見た。「あ

なたはとんがり鴉さまのことも知らずに、このコンクールに応募されたのですか？」

「申しわけありません。どうも世事に疎いもので」

「困りましたな」と言つて専務は首を振つた。「とんがり鴉さまのことも御存知ないというのは……でも、ま、よろしゅうござんす。私のあとについていらつしやい」

僕は彼のあとについて部屋を出て、廊下を歩き、エレベーターで六階に上り、それからまた廊下を歩いた。廊下のつきあたりに大きな鉄の扉があった。プザーを押すとがっしりとした体格の守衛が出てきて、相手が専務であることを確認してから扉の鍵を開けた。なかなか**嚴重な警戒下**をお警戒が**嚴重だ**。

「この中にとんがり鴉さまがいらつしやいます」と専務が言った。「とんがり鴉というのは昔々からとんがり焼だけを食して生きておる特殊な鴉の一族であります……」

それ以上の説明は不要だった。部屋の中には百羽以上の数の鴉がいた。高さ五メートルくらいのがらんとした倉庫みたいな部屋に何本もの横棒が渡され、そこにとんがり鴉がずらりと並んで座つていた。とんがり鴉は普通の鴉よりずっと大きく、大きなもので体長一メートルくらいあった。小さいものでも六十センチくらいはある。よく見ると彼らには目がなかった。目のあるべき場所には白い脂肪の**小たまり塊**りがくつついているだけだ。おまけに体ははちきれんばかりにむくんでいる。**部屋の中はうす暗く、いやなおい**がした。

僕たちが中に入った音を聞きつけるととんがり鴉たちはばたばたと羽ばたきをしながら一斉に何かを叫びはじめた。最初のうちはただの轟音にしか聞こえなかったが、やがて耳が馴れてくると彼らがみんな「とんがり焼・とんがり焼」と叫んでいるらしいことがわかった。見るからにおぞましい動物だ。

専務が手に持っていた箱の中からとんがり焼を出して床に撒くと、百羽のとんがり**鴉**たちが一斉にそれにとびかかった。そしてとんがり焼を求めて互いの足にくらいつき、目をつつきあつた。やれやれ、これじゃたしかに目が失くなつてしまふわけだ。

その次に専務はさつきとは違うべつの箱から、とんがり焼に似た菓子を取りだしてばらばらと床に撒いた。「よござんすか、これはとんがり焼コンクールで落選したものです」

鴉たちは前と同じようにそれに群がったが、それがとんがり焼でないことがわかるとそれを吐き捨て、口ぐちに怒りの声をあげた。

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

と彼らは大声で叫んだ。その声为天井に反響して、耳の奥が痛くなるほどだった。

「ほらね、本物のとんがり焼しか食べないんです」と得意そうに言った。「偽物だと口もつけないんです」

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

「じゃ、こんどはあなたのお作りになった新とんがり焼を撒いてみましょう。食べれば入選、食べなければ落選です」

大丈夫かな、と僕は不安になった。「そんなことして大丈夫なんですか？」と僕は専務にたずねてみた。なんだかす

ごく不吉な予感がしたからだ。だいたいこんないい加減な連中に食べさせてみて当落を決めるなんて**間違つていあすごく変な話だ**。もつとまともな**選り方があるはずなのだ**。

しかし専務は僕の**患惑不安**にはおかまいなしに、僕が応募した「新とんがり焼」を景気よく床に撒いた。鴉たちはまたそれに群がった。それから混乱が始まった。ある鴉は満足してそれを食べ、ある鴉はそれを吐き出してとんがり焼！ とどなった。次にそれにありつくことができなかった鴉が興奮して、それを食べた鴉の喉笛をくちばしで突いた。血が飛び散つた。べつの鴉が誰かが吐き出した菓子にとびついたが、とんがり焼！ と叫んでいた巨大な鴉に捕まって腹を裂かれた。そんな具合に乱闘が始まった。血が血を呼び、憎しみが憎しみを呼んだ。たかが菓子のことなのだけれど、鴉たちにとってはそれが全てなのだ。それがとんがり焼であるか非とんがり焼であるか、それだけが生存をかけた問題なのだ。

「ほらごらんさい」と僕は専務に言った。「急にあんなに撒いちやうものだから刺激が強すぎたんですよ」

それから僕は一人で部屋を出て、エレベーターで下に降り、とんがり製菓の建物を出た。賞金の二百万円は惜しかったけれど、この先の長い人生をあんな**奇妙な鴉**たちの相手をしながら生きていく**なんてもまわびわだのはごめんだ**。

僕は自分の食べたいものだけを作つて、自分で食べる。鴉なんか**いつまでもお互いにつつきあつて死んでしまへば**

いればいいんだ。

とんがり焼の盛衰

村上 春樹

131

ぼんやりと朝の新聞を眺めていたら、隅の方に「名菓とんがり焼・新製品募集・大説明会」という広告が載っていた。とんがり焼っていったい何のことなのかよくわからない。でも名菓とあるからにはやはり菓子なのだろう。僕は菓子についてはちよつとうるさい方である。それに暇だったから、とにかくその「大説明会」というのに顔を出してみることにした。

「大説明会」はホテルの広間で催され、お茶と菓子までついていた。菓子はもちろんとんがり焼である。僕はひとつまんでみたが、とくに感心する味ではなかった。甘さの質がねちねちとしていて、**小わ皮**の部分ももつさりとしすぎている。今の若い人間がこんなものを好んで食べるとはとても思えない。

でも説明会に来ていたのは僕と同じくらいか、あるいはもっと年下の若い人ばかりだった。僕は952番という番号札をもらったが、まだあとから百人くらいは来たから、だいたい千人以上の人間がこの説明会に来たことになる。たいしたものだ。

僕の隣には二十歳くらいの度の強い眼鏡をかけた女の子が座っていた。美人ではないが、わりに性格の良さそうな女の子だ。

「ねえ、君はこれまでにとんがり焼って食べたことあった？」と僕は訊ねてみた。

「あたりまえじゃない」と女の子は言った。「だって有名で、すもの」

「でもそんなに美味く……」と僕が言いかけたところで彼女が僕の足を蹴とばした。まわりの人間が僕の**132**方を見ろりと見た。嫌な雰囲気だ。でも僕は「熊のプー」のような無邪気な目をしてその場をやりすぎした。

「あなたってバカねえ」と少しあとで女の子がそつと耳うちした。「ここにきてとんがり焼の悪口なんか言ったら、とんがり焼につかまって生きては帰れないんだから」

「とんがり焼？」と僕はびつくりして叫んだ。「とんがり焼って……」

「し——っ」と女の子が言った。説明会が始まった。説明会ではまず「とんがり製菓」の社長がとんがり焼の歴史について話した。平安時代に誰が何をしてこうなったのがとんがり焼の原型であるとかいった類の真偽不明の話だ。古今和歌集にもとんがり焼についての和歌が入っているということである。おかしいから笑おうかとも思ったが、まわりの人間はみんな真剣そうな顔で聞き入っていたし、

とんがり焼もこわいので結局笑わなかった。

社長の説明はまる一時間つづいた。すぐく退屈だった。彼の言いたいことは要するに「とんがり焼は伝統のある菓子である」というだけのことなのだ。そんなの一行で済む。

それから専務が出てきて、とんがり焼新製品募集についての説明を行なった。長い歴史を誇る国民名菓とんがり焼もそれぞれの時代に即した新しい血を入れて弁証法的に発展していかなければならないとかいった説明だ。そういうと聞こえはいいが、要するにとんがり焼の味が古くさくなって売上げが落ちてきたので若い人のアイデアが欲しいということである。それならそうとはつきり言えはいいのだ。

帰りに募集要**項綱**をもらった。とんがり焼をベースにした菓子を作って1カ月後に持参すること、賞金は二百万円とある。二百万円あれば恋人と結婚して、新しいアパートに移ることができる。それで僕は新とんがり焼を作ることにした。

前にも言ったように、僕は菓子についてはちよつとうるさい。あんこやクリームやパイの**小わ皮**なんか、ど**133**んな風にも作ることができる。一カ月で新しい現代的なとんがり焼を作り出すくらい簡単である。僕は**水締切**の日に新とんがり焼をニダース作り、とんがり製菓の受付に持っていった。

「おいしそうねえ」と受付の女の子が言った。

「おいしいよ」と僕は言った。

*

その一カ月後にとんがり製菓から明日会社においてほしいという電話がかかってきた。僕はネクタイをしめてとんがり製菓にかけた。そして応接室で専務と話をした。

「あなたの応募された新とんがり焼は社内でもなかなか好評であります」と専務が言った。「なかでも、あ——、若い層に評判がよろしい」

「それはどうも」と僕は言った。

「しかし一方でですな、ん——、年配のものの中には、これではとんがり焼ではないと申すものもおりましてですな、ま、甲論乙駁という状況でありますな」

「はあ」と僕は言った。いったい何か言いたいのかさっぱりわからない。

「で、この際にとんがり焼さまの御意見をうかがおうではないかと、重役会議で決定致しましたのであります」

「とんがり焼！」と僕は言った。「とんがり焼というのはいったい何のことでしょうか？」

専務はわけがわからないといった顔をして僕を見た。「あなたはおとんがり焼さまのことも知らずに、このコンクールに応募されたのですか？」

「申しわけありません。どうも世事に疎いもので」**134**

「困りましたな」と言つて専務は首を振つた。「とんがり鴉さまのことも御存知ないというのは。……でも、ま、よろしゅうござんす。私のあとについていらつしやい」

僕は彼の**後あと**について部屋を出て、廊下を歩き、エレベーターで六階に上り、それからまた廊下を歩いた。廊下のつきあたりに大きな鉄の扉があつた。ブザーを押すとがつしりとした体格の守衛が出てきて、相手が専務であることを確認してから扉の鍵を開けた。なかなか嚴重な警戒である。

「この中にとんがり鴉さまがいらつしやいます」と専務が言つた。「とんがり鴉というのは昔々からとんがり焼だけを食して生きておる特殊な鴉の一族でありまして……」

それ以上の説明は不要だつた。部屋の中には百羽以上の数の鴉がいた。高さ五メートルくらいのがらんとした倉庫みたいな部屋に何本もの横棒が渡され、そこにとんがり鴉がずらりと並んで座つていた。とんがり鴉は普通の鴉よりずっと大きく、大きなもので体長一メートルくらいあつた。小さいものでも六十センチくらいはある。よく見ると彼らには目がなかつた。目のあるべき場所には白い脂肪のかたまりがくつついてるだけだ。おまけに体ははちきれんばかりにむくんでいる。

僕たちが中に入った音を聞きつけるととんがり鴉たちはばたばたと羽ばたきをしながら一斉に何かを叫びはじめた。最初のうちはただの轟音にしか聞こえなかつたが、やがて耳が馴れてくると彼らがみんなで「とんがり焼・とんがり焼」と叫んでいるらしいことがわかつた。見るからにおぞましい動物だ。

専務が手に持つていた箱の中らとんがり焼を出して床に撒くと、百羽のとんがり鴉たちが一斉にそれにとびかかつた。そしてとんがり焼を求めて互いの足にくらいつき、目をつつきあつた。やれやれ、**これじゃたしかに**目が失くなつてしまふわけだ。

その次に専務はさつきとは違うべつの箱から、とんがり焼に似た菓子を取りだしてばらばらと床に撒いた。「よござんすか、これはとんがり焼コンクールで落選したものです」

135

鴉たちは前と同じようにそれに群がつたが、それがとんがり焼でないことがわかるとそれを吐き捨て、口ぐちに怒りの声をあげた。

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

と彼らは大声で叫んだ。その声が天井に反響して、耳の奥が痛くなるほどだつた。

「ほらね、本物のとんがり焼しか食べないんです」と得意

そうに言つた。「偽**もの**物だと口もつけません」

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

「じゃ、こんどはあなたのお作りになつた新とんがり焼を撒いてみましょう。食べれば入選、食べなければ落選です」

大丈夫かな、と僕は不安になつた。なんだかすくなく吉な予感がしたからだ。だいたいこんないい加減な連中に食べさせてみて当落を決めるなんて間違つてゐる。しかし専務は僕の思**わく**惑にはおかまいなしに、僕が応募した「新とんがり焼」を景気よく床に撒いた。鴉たちはまたそれに群がつた。それから混乱が始まつた。ある鴉は満足してそれを食べ、ある鴉はそれを吐き出してとんがり焼！とどなつた。次にそれにあることができなかつた鴉が興奮して、それを食べた鴉の喉笛をくちばしで突いた。血が飛び散つた。べつの鴉が誰かが吐き出した菓子にとびついたが、とんがり焼！と叫んでいた巨大な鴉に捕まつて腹を裂かれた。そんな具合に乱闘が始まつた。血が血を呼び、憎しみが憎しみを呼んだ。たかが菓子**136**のことなのだけれど、鴉たちにとってはそれが全てなのだ。それがとんがり焼であるか非とんがり焼であるか、それだけが生存をかけた問題なのだ。

「ほらごらんなさい」と僕は専務に言つた。「急にあんなに撒いちやうものだから刺激が強すぎたんですよ」

それから僕は一人で部屋を出て、エレベーターで下に降り、とんがり製菓の建物を出た。賞金の二百万円は惜しかつたけれど、この先の長い人生をあんな鴉たちの相手をしてながら生きていくなんてまっぴらだ。

僕は自分の食べたいものだけを作って、自分で食べる。鴉なんかお互いにつつきあつて死んでしまえばいいんだ。

とんがり焼の盛衰

村上 春樹

143

ぼんやりと朝の新聞を眺めていたら、隅の方に「名菓とんがり焼・新製品募集・大説明会」という広告が載っていた。とんがり焼っていったい何のことなのかよくわからない。でも名菓とあるからにはやはり菓子なのだろう。僕は菓子についてはちよつとうるさい方である。それに暇だったから、とにかくその「大説明会」というのに顔を出してみることにした。

「大説明会」はホテルの広間で催され、お茶と菓子までついていた。菓子はもちろんとんがり焼である。僕はひとつまんでみたが、とくに感心する味ではなかった。甘さの質がねちねちとしていて、かわの部分もつさりとしすぎている。今の若い人間がこんなものを好んで食べるとはとても思えない。

でも説明会に来ていたのは僕と同じくらいか、あるいはもっと年下の若い人ばかりだった。僕は952番という番号札をもらったが、まだあとから百人くらいは来たから、だいたい千人以上の人間がこの説明会に来たことになる。たいしたものだ。

僕の隣には二十歳くらいの度の強い眼鏡をかけた女の子が座っていた。美144人ではないが、わりに性格の良さそうな女の子だ。

「ねえ、君はこれまでにとんがり焼って食べたことあった？」と僕は訊ねてみた。

「あたりまえじゃない」と女の子は言った。「だって有名ですもの」

「でもそんなに美味く……」と僕が言いかけたところで彼女が僕の足を蹴とばした。まわりの人間が僕の方をじろりと見た。嫌な雰囲気だ。でも僕は「熊のプー」のような無邪気な目をしてその場をやりすぎた。

「あなたってバカねえ」と少しあとで女の子がそつと耳うちした。「ここに来てとんがり焼の悪口なんか言ったら、とんがり鴉がらすにつかまって生きては帰れないんだから」

「とんがり鴉？」と僕はびつくりして叫んだ。「とんがり鴉って……」

「し——っ」と女の子が言った。説明会が始まった。

説明会ではまず「とんがり製菓」の社長がとんがり焼の歴史について話した。平安時代に誰が何をしてこうなったのがとんがり焼の原型であるとかいった類の真偽不明の話だ。古今和歌集にもとんがり焼についての和歌が入っているということである。おかしいから笑おうかとも思ったが、

まわりの人間はみんな真剣そうな顔で聞き入っていたし、とんがり鴉もこわいので結局笑わな145かった。

社長の説明はまる一時間つづいた。すぐく退屈だった。彼の言いたいことは要するに「とんがり焼は伝統のある菓子である」というだけのことなのだ。そんなの一行で済む。

それから専務が出てきて、とんがり焼新製品募集についての説明を行なった。長い歴史を誇る国民名菓とんがり焼もそれぞれの時代に即した新しい血を入れて弁証法的に発展していかねばならないとかいった説明だ。そういうと聞こえはいいが、要するにとんがり焼の味が古くさくなって売上げが落ちてきたので若い人のアイデアが欲しいということである。それならそうとはつきり言えはいいのだ。

帰りに募集要項をもらった。とんがり焼をベースにした菓子を作って1カ月後に持参すること、賞金は二百万円、とある。二百万円あれば恋人と結婚して、新しいアパートに移ることが出来る。それで僕は新とんがり焼を作ることにした。

前にも言ったように、僕は菓子についてはちよつとうるさい。あんこやクリームやパイのかわなんか、どんな風にも作ることができる。一カ月で新しい現代的なとんがり焼を作り出すくらい簡単である。僕はメ切の日に新とんがり焼146焼をニダース作り、とんがり製菓の受付に持っていた。

「おいしそうねえ」と受付の女の子が言った。

「おいしいよ」と僕は言った。

*

その一カ月後にとんがり製菓から明日会社においてほしいという電話がかかってきた。僕はネクタイをしめてとんがり製菓にでかけた。そして応接室で専務と話をした。

「あなたの応募された新とんがり焼は社内でもなかなか好評であります」と専務が言った。「なかでも、あ——、若い層に評判がよろしい」

「それはどうも」と僕は言った。

「しかし一方ですな、ん——、年配のものの中には、これではとんがり焼ではないと申すものもおりましてですな、ま、甲論乙駁という状況でありますな」

「はあ」と僕は言った。いったい何か言いたいのかさっぱりわからない。

「で、この際とんがり鴉さまの御意見をうかがおうではないかと、重役会議で決定致しましたのであります」147

「とんがり鴉！」と僕は言った。「とんがり鴉というのはいったい何のことでしょうか？」

専務はわけがわからないといった顔をして僕を見た。「あなたとはとんがり鴉さまのことも知らずに、このコンクール

に応募されたのですか？」

「申しわけありません。どうも世事に疎いもので」

「困りましたな」と言つて専務は首を振った。「とんがり鴉さまのことも御存知ないというのは。……でも、ま、よろしゅうござんす。私のあとについていらつしやい」

僕は彼の後について部屋を出て、廊下を歩き、エレベーターで六階に上り、それからまた廊下を歩いた。廊下のつきあたりには大きな鉄の扉があった。ブザーを押すとがしりとした体格の守衛が出てきて、相手が専務であることを確認してから扉の鍵を開けた。なかなか厳重な警戒である。

「この中にとんがり鴉さまがいらつしやいます」と専務が言った。「とんがり鴉というのは昔々からとんがり焼だけを食して生きておる特殊な鴉の一族でありまして……」

それ以上の説明は不要だった。部屋の中には百羽以上の数の鴉がいた。高さ五メートルくらいののがらんとした倉庫みたいな部屋に何本もの横棒が渡され、**148**そこにとんがり鴉がずらりと並んで座っていた。とんがり鴉は普通の鴉よりずっと大きく、大きなもので体長一メートルくらいあった。小さいものでも六十センチくらいはある。よく見ると彼らには目がなかった。目のあるべき場所には白い脂肪のかたまりがくっついていていただけだ。おまけに体にははちきれんばかりにむくんでいる。

僕たちが中に入った音を聞きつけるととんがり鴉たちはばたばたと羽ばたきをしながら一斉に何かを叫びはじめた。最初のうちはただの轟音にしか聞こえなかったが、やがて耳が馴れてくると彼らがみんな「とんがり焼・とんがり焼」と叫んでいるらしいことがわかった。見るからにおぞましい動物だ。

専務が手に持っていた箱の中からとんがり焼を出して床に撒くと、百羽のとんがり鴉たちが一斉にそれにとびかかった。そしてとんがり焼を求めて互いの足にくらいつき、目をつつきあった。やれやれ、目が失くなってしまいうわけだ。

その次に専務はさつきとは違うべつの箱から、とんがり焼に似た菓子を取りだしてばらばらと床に撒いた。「よござんすか、これはとんがり焼コンクールで落選したものです」鴉たちは前と同じようにそれに群がったが、それがとんがり焼でないことが**149**わかるとそれを吐き捨て、口ぐちに怒りの声をあげた。

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

と彼らは大声で叫んだ。その声が天井に反響して、耳の奥が痛くなるほどだった。

「ほらね、本物のとんがり焼しか食べないんです」と得意そうに言った。「偽ものだと口もつけないんです」

とんがり焼！

とんがり焼！

とんがり焼！

「じゃ、こんどはあなたのお作りになった新とんがり焼を撒いてみましょう。食べれば入選、食べなければ落選です」

大丈夫かな、と僕は不安になった。なんだかすごく不吉な予感がしたからだ。だいたいこない加減な連中に食べさせてみて当落を決めるなんて間違っている。しかし専務は僕の思わくにはおかまいなしに、僕が応募した「新とんがり焼」を景気よく床に撒いた。鴉たちはまたそれに群がった。それから**150**混乱が始まった。ある鴉は満足してそれを食べ、ある鴉はそれを吐き出して**とんがり焼！**とどなった。次にそれにありつくことができなかつた鴉が興奮して、それを食べた鴉の喉笛をくちばしで突いた。血が飛び散った。べつの鴉が誰かが吐き出した菓子にとびついたが、**とんがり焼！**と叫んでいた巨大な鴉に捕まって腹を裂かれた。そんな真面目に乱闘が始まった。血が血を呼び、憎しみが憎しみを呼んだ。たかが菓子のことなのだけれど、鴉たちにとってはそれが全てなのだ。それがとんがり焼であるか非とんがり焼であるか、それだけが生存をかけた問題なのだ。

「ほらごらんさい」と僕は専務に言った。「急にあんなに撒いちやうものだから刺激が強すぎたんですよ」

それから僕は一人で部屋を出て、エレベーターで下に降り、とんがり製菓の建物を出た。賞金の二百万円は惜しかったけれど、この先の長い人生をあんな鴉たちの相手をしてながら生きていくなんてまっぴらだ。

僕は自分の食べたいものだけを作って、自分で食べる。鴉なんかお互いにつつきあつて死んでしまえばいいんだ。